

第一番 左澤学校

共生 One for all, All for one

荒す教師・まとめる教師

ちょっと古い話になる。2016 小三技術 5月号に出ていた標題だ。それにしても、インパクトのある題である。

危機は6月、11月、2月にやってくる。

①目標管理の危機

4月に学級目標が掲げられ、子ども達とめざす姿を共有してきた。時が経つにつれて、学級のゴールイメージを教師自身の意識が薄れる。そして目標はお飾りとなる。結果として集団としてのベクトルがなくなる。教師自身が学級目標に照らし合わせ、時には子どもと話し合うことも必要なのだろう。

②組織の危機

日常的に学習課題や生活課題など山積している。多忙な教師は、課題の遂行に目が向く。行事をこなすことや学習進度等に教師の意識が傾く。そんな時、学級全体の意欲が下がる。子どもの状況に目を向け、子どもの取り組む姿勢を、誉め、励ます指導を忘れてはならない。

③コミュニケーションの危機

学級には3つの人間関係がある。ア：教師と子ども、イ：子ども同士、ウ：学習活動における役割に基づく人間関係。イを支えているのはアである。そしてウが高まる。時には子どもの話に耳を傾け、温かい声をかける。時には教師の思いを伝える。そこにも教師のやりがいがある。

創立したての朝少 自然の家で…

県立朝日少年自然の家が創立された頃を思い出す。創立当時のキーワードは、「規律」「5分前行動」であった。中学校の荒れが社会問題化していた時である。私は河北町勤務だった。5年生38名、2泊3日の宿泊学習を実施した。野外炊飯の後、食器点検。所員のきびしいチェック。今思い出しても、笑ってしまうほど厳しかった。

テント設営の時、次の活動時間が迫っていた。私はあせりといらだちがあった。出てきた言葉は、「どの班が一番早くできるか競争だ。」子ども達の競争心に火がついた。そして、いくつかの班では、けんかが始まった。私がめあてとしていた「助け合い協力し合う」は、どこかに消えた。

それから、私は考えた。活動にゆったりとした時間を持たせる。私もゆったりと構える。テント設営。試行錯誤しながら支柱両端を持ちあって、ドーム本体に差し込む。「〇〇君、ここ持っていて。」「いいかい、一斉ので、曲げるからね」「うんわかった。」こんなやりとりが聞こえる。若かった私にはこの声が聞こえなかった。あの時、私は【荒す教師】だったのかもしれない。

